

## シンポジウム14

病理細胞1 「ゲノム検査を目的とした組織の取り扱いー固定、薄切や結果に基づく考察および多施設調査報告ー」

### 当院における病理検体を用いた遺伝子検査の運用と現状

◎遠峰 由希恵<sup>1)</sup>、大久保 文彦<sup>1)</sup>、山口 知彦<sup>1)</sup>、中附 加奈子<sup>1)</sup>  
仲 正喜<sup>1)</sup>、木村 理恵<sup>1)</sup>、野上 美和子<sup>1)</sup>

国立大学法人九州大学病院<sup>1)</sup>

【現状】 当院において、病理検体を用いた遺伝子検査は依頼項目数、総出検数共に増加傾向にある。2021年1月1日～12月31日の1年間に、出検された遺伝子検査の総数は1037件（月平均86件）であり、依頼項目数は29項目であった。その内訳はコンパニオン診断756件（月平均63件）、がん遺伝子パネル検査は281件（月平均23件）であった。コンパニオン診断では、マイクロサテライト不安定性検査（固形がん）が最も出検数が多く206件であり、がん遺伝子パネル検査ではFoundationOne CDx（F1CDx）188件が最も多かった。

【運用】 当院では、一部のコンパニオン診断を除き遺伝子検査は全て外部委託し、病院情報システムと連携させた病理診断システムにて、組織診検査、細胞診検査と共に情報管理をしている。臨床より依頼された遺伝子検査は全例、臨床検査技師が基本的な検体情報（採取日からの期間、脱灰の有無、最終診断報告書の内容等）を確認し、病理医が委託検査会社より提示されている各検査項目の検体提出要件を検体が満たしているかどうか HE 染色標本で適否判定と薄切枚数の指示を行っている。この運用では、遺伝子検査の作業効率化・標準化を目的として、当院独自で作成した「遺伝子検査チェックシート」3種類（コンパニオン診断用、肺がん関連遺伝子検査用、がん遺伝子パネル検査用）を病理部員間での情報管理のために活用している。

【結果】 2021年に出検されたがん遺伝子パネル検査のうち、最も多かった F1CDx 188件の検査成功率は、94.6%（178/188件）であった。検査中止となった10件は切除検体3件、生検検体7件であった。検査中止理由は、DNA 収量不足が最も多く30%（3/10件）であった。

【おわりに】 今回は、当院における遺伝子検査の運用と現状に加えて、病理医による遺伝子検査提出のための検体適否判定の結果とその取り扱い、腫瘍細胞核含有率や提出用未染標本の作製枚数等の実際についても報告したい。

【謝辞】 ご指導いただきました小田義直先生、山元英崇先生に感謝申し上げます。